

ゴンザ『新スラブ・日本語辞典』のアクセント

坂口, 至
宮崎大学教育学部講師

<https://doi.org/10.15017/10467>

出版情報 : 文献探究. 16, pp.1-13, 1985-09-25. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

ゴンザ『新スラヴ・日本語辞典』のアクセント

坂 口 至

0 はしがき

国語アクセントの史的変遷を跡づける文献は、これまで、京都方言を中心とする畿内方言に関するものに限られていたと言ってよい。かつて、近世関東方言のアクセント資料として、『音声論』(斎藤彦麿)という本が、福島邦道氏によって紹介されたことがあるが(『江戸言葉のアクセントについての一資料』国語学12、1953)、金田一春彦氏によれば、アクセント資料としては、はなはだ信頼できないものであるという(『国語アクセントの史的研究』塙書房、1974 262ペ)。

しかし、筆者は、村山七郎氏の紹介になる薩摩漂流民ゴンザ(1717~1739)の言語資料のうち、『露日語彙集』(1736)と『日本語会話入門』(1736)の2資料に見られるアクセント符号を検討した結果、それが18世紀前半の薩隅方言のアクセント資料として十分信頼できるものであること、特に2音節名詞では現代鹿児島アクセントと同じ型が帰納できること、また3音節以上の語では、現代鹿児島アクセントと型の対応を示しながらも、かなり異なった内容のアクセントであったらしいことなどを明らかにした(『漂流民ゴンザのアクセント』文献探究13、14 1983、1984、「漂流民ゴンザのアクセント—追考—」宮崎大学教育学部紀要人文科学57 1985)。

このたびは、最近やはり村山七郎氏によって公刊されたゴンザの第3の言語資料『新スラヴ・日本語辞典』のアクセント符号を見ることによって、前稿の結論が追認できるかどうかを検討してみたいと思う。

1 資料と方法

1.1 ゴンザの『新スラヴ・日本語辞典』(1736~1738、以下『スラヴ』と略称)の内容の紹介は、実は今回の公刊が初めてではなく、村山七郎氏によって、そのうちの方言語彙の部分が早く紹介されていたものである(『新スラヴ・日本語辞典における18世紀初めの薩摩方言語彙』文学研究(九州大学)68、1971)。しかし、その訳出部分にはアクセントの記載が少なく、方言語彙という性格上、他のアクセントとの比較にもわかには成し難く感じられたので、前稿の資料には加えなかった。ところが、今回完全な形でナウカ社から出版されたものを見ると、421ページのうち約3分の1強の166ページにわたって、多量にアクセント符号の記載のあることがわかった。もし全ページにアクセント符号が記載されていれば、どんなにかすばらしいアクセント資料になったろうと惜しまれるくらいである。

1.2 ゴンザのアクセントの再構方法は以下の通りで、前稿(1985)と同じである。

- (1)アクセント符号は、アクセント核を表示するものとする。
- (2)1単語もしくは1文節の単位でアクセントを考える。
- (3)現代鹿児島アクセントとの比較を中心とする。ただし、2音節名詞の場合はアクセント

セント語類の観点も導入する。

(4)アクセントの韻律論的単位については、モーラorシラビームの先入観を捨て、モーラ数とシラビーム数が同じものでひとまず再構したのち、他のものに及ぶ。

2 2音節語のアクセント

2.1 2音節名詞のアクセント

例によって、現在諸方言間において型の対応が比較的鮮明な2音節名詞のアクセントから見て行く。まず、アクセント語類の観点でゴンザのアクセント符号を整理して見よう。モーラ数とシラビーム数の一致しない語、すなわち第2音節に狭母音[i][u]を含むものはほとんどすべて第1音節にアクセント符号が付されていて、型の再構には役立たないので対象から除く。各語の類所属についても、前稿同様、金田一春彦氏作成のアクセント語類一覧表(『国語アクセントの史的研究』62~73頁)に大体従い、問題のありそうな語は漢語とともに保留扱いにする。なお、かっこ内の片仮名表記は、底本としたナウカ社本の表記に従ったもので、数字は底本の所在ページを示す。また、アンダーラインを付したものは『露日語彙集』『日本語会話入門』(以下併せて『露日・会話』と略称する)に見えない単語である。(以下同じ)

○○型

【一類】枝(イ^エダ、74)顔(カ^ヲ、173)籠(カ^ゴ、159)風(カ^ジエ、75・75)金(カ^ネ、90・151・187)壁(カ^ベ、119)酒(サ^ケ、50・81)城(シ^ロ、167)鞆(シ^ワ、184)袖(ソ^ヂエ、127)壺(ツ^ボ、81・163・168)虎(ト^ラ、171)箱(フ^ツコ、170)髭(フ^イゲ、35)紐(フ^イボ、120)筆(フ^デエ、157)的(マ^ト、179)溝(ミ^ゾ、36・146)棟(ム^ネ、83)

【二類】上(ウ^イエ、47・74・81・81)殻(カ^ラ、112)川(カ^ワ、88・102・153・154)カ^ヲ、98)寺(テ^ラ、155)十(ト^ヲ、91)旗(フ^タタ、135)胸(ム^ネ、84)村(ム^ラ、114)

【三類】竿(サ^ヲ、112)殿(ト^ノ、159)鱸(ト^モ、163)墓(フ^タカ、83)腹(フ^タラ、113)骨(フ^オネ、164)豆(マ^メ、81)

【四類】後(ア^ト、121)喉(ノ^ド、81)

【五類】桶(オ^ケ、154)蔭(カ^ゲ、130)鍋(ナ^ベ、164)

【保留】賭^ケ(カ^ケ、123・124)亀(カ^メ、112)小屋(コ^ヤ、162); 医^者(イ^シヤ、95)騎馬(キ^バ、162)後家(ゴ^ケ、44)世^話(シ^エワ、167)二度(ニ^ド、68・88・89)馬鹿(バ^カ、29・40・103)

○○型

【一類】鞞(ク^ウ、157)髭(フ^ゲ、36)蓋(フ^タ、167・192)

【二類】人(フ^ト、29・93・93)上(ウ^イエ、190・190)

【三類】穴(アナ、92・175)池(イ^ケ、108)馬(ウ^マ、113・161・174)裏(ウ^ラ、129)皮(カ^ワ、160・160)草(ク^サ、133)熊(ク^マ、178)霜(シ^モ、184)脛(ス^ネ、80)綱(ツ^ナ、40・119・161)殿(ト^ノ、108)墓(フ^タカ、183)浜(フ^ママ、29・37)腹(フ^タラ、39)豆(マ^メ、183)店(ミ^シエ、170)物(モノ、47)山(ヤマ、175)夢(ユ^メ、179)綿(ワ^タ、40)

【四類】板(イ^タ、99・102)糸(イト、184)鎌(カ^マ、163)咎(ト^ガ、50)巾(ナ^カ、54・178)

【五類】桶(オケ、90)声(コイェ、77)聲(ムコ、137)

【保留】嘘(ウツ、166・172・173)糞(クツ、79・80)小屋(コヤ、192)下(シタ、97・150)

胼胝(タコ、35・36)土手(ドチエ、42)触れ(フレ、191)孫(マゴ、54);医者(イシヤ、64・151・162・172)風呂(フロ、184)

以上をわかり易いように表にまとめてみよう(表1)。単語の横の数字は2例以上ある場合の用例数、かっこ内は延語数を示している。また、※の欄の数字は参考までに『露日・会話』の結果を示したものである。(以下同じ)

(表1)

	一類	二類	三類	四類	五類	保留
○○型	枝, 顔, 籠, 風 ₂ , 金 ₃ , 壁, 酒 ₂ , 城, 鞆, 袖, 壺 ₃ 村, 虎, 箱, 髭, 紐, 筆, 的, 溝 ₂ , 棟	上 ₂ , 殻, 川 ₅ , 寺, 十, 旗, 胸, 村,	竿, 殿, 鱧, 墓, 腹, 骨, 豆	後, 喉	桶, 蔭, 鍋	賭け ₂ , 亀, 小屋, 医者, 騎馬, 後家, 世話, 二度 ₃ , 馬鹿 ₃
	19(26)	8(15)	7(7)	2(2)	3(3)	
※	24(48)	9(15)	1(1)	4(6)	0(0)	
○〇型	鉄, 髭, 蓋 ₂	上 ₂ , 人 ₃	穴 ₂ , 池, 馬 ₃ , 裏, 皮 ₂ , 草, 熊, 霜, 脛, 綱 ₃ , 殿, 墓, 浜 ₂ , 腹, 豆, 店, 物, 山, 夢, 綿	板 ₂ , 糸, 鎌, 咎, 中	桶, 声, 聲	嘘 ₃ , 糞 ₂ , 小屋, 下 ₂ , 胼胝 ₃ , 土手, 触れ, 孫, 医者 ₄ , 風呂
	3(4)	2(5)	20(27)	5(7)	3(3)	
※	6(6)	2(4)	27(42)	14(20)	8(8)	

これによれば、『スラヴ』の場合も、『露日・会話』ほどの正確さはないにしろ、一類・二類対三類・四類・(五類)という二型対立の様相を見とることができる。なお、例外となる17語のうち7語(髭・上・殿・墓・腹・豆・桶)は、反対の例外でない表示も存在し、また一類・二類の例外となる語のうち、上を除いた4語は第1音節が<無声子音+狭母音>という sonority の小さい音節構造となっているため、そこに pitch があっても stress が認識されにくかった可能性がある。

次に、現代鹿児島アクセントとの関係であるが、既に前稿で述べたように、ゴンザのアクセントが、A型(一類・二類)~○¹○/, B型(三類・四類・五類)~○○¹/という二型アクセントである現代鹿児島アクセントと音韻論的に同じものであったことは明白である。ついでに、個々の単語アクセントの実態を見ておくと、現代鹿児島アクセントと一致しないのは、上の表の一類~五類の例外のうち三類の鱧を除くすべてと、保留のうちの、賭け・亀・小屋・医者・後家・世話・二度・馬鹿(以上B型)、下(A型)の9語15例、合わせて25語35例となり、延語数では全131例中73.3%のものが現代鹿児島アクセントに一致する。

(4)

ちなみに、『露日・会話』では、全178例のうち例外は31例で、83.1%の一致率である。

2.2 2音節形容詞のアクセント 『スラヴ』に現れる2音節形容詞(カ語尾)は、『露日・会話』同様、次の1語である。

〇〇型

良い(ヨカ、30・93・93・93・93・94・150・175・176)

この語は、現代鹿児島アクセントでB型(/〇〇¹/)に属するので、ゴンザのアクセントはこれと符合している。

なお、2音節語はこの他に当然動詞が含まれているが、第2音節が必然的に[u]を含むために、2音節名詞のうちの第2音節に[i][u]を含むものと同じ表示となり、アクセント型の再構には役立たないので省略する。

3 3音節語のアクセント

3.1 3音節語のアクセントは、名詞と形容詞のうち、モーラ数とシラビーム数の一致するものによって再構し、一致しない名詞・形容詞、動詞の順で検討する。前稿で扱った<2音節名詞+1音節助詞>は、用例数が10例に満たないので省略する。

3.2 モーラ数とシラビーム数が一致する語における、『スラヴ』の3音節名詞・形容詞のアクセントを、現代鹿児島アクセントのA型(/〇〇¹〇/)、B型(/〇〇〇¹/)と比較して示すと次のようである。

[名詞]

〇〇〇型

<A型>山舎(イナカ、90)旨さ(ムマサ、51・150)女(オメゴ、56・104)小枝(コイエダ、74)酒屋(サカヤ、50・154・167)芝居(シバヤ、161)捨子(スチエゴ、71)力(チカラ、183・184)長さ(ナガサ、92)布子(ノノコ、154)ひよこ(フィヨコ、169)双子(フタゴ、88)向かい(ムカイエ、127)

<B型>従兄弟(イトゴ、89)厩(ムマヤ、162)男(オトコ、185)表(オモチエ、81)葎(キノコ、83)言葉(コトバ、170)米屋(コメヤ、89)

〇〇〇型

<B型>従兄弟(イトゴ、37)蝗(イナゴ、160)イロハ(イロフテ、40)言葉(コトバ、93)虱(シタメ、64・69)卵(タマゴ、41)裸(ファダカ、189)畑(ファダケ、85)裸足(ファダシ、35)広さ(フィロサ、69)仏(フォドケ、31)

[形容詞]

〇〇〇型

<A型>きつい(クツカ、103)長い(ナガカ、92・96)

〇〇〇型

<B型>白い(シトカ、41)太い(フトカ、77)弱い(ヨワカ、29)

以上を一つの数表にまとめてみよう(表2)。

(表 2)

	A 型 (/○○ ¹ ○/)				B 型 (/○○○ ¹ /)			
	名 詞		形 容 詞		名 詞		形 容 詞	
○○○型				※1(1)				
○○○型	13(18)	※11(18)	2(3)	※5(8)	7(7)	※10(15)		※9(11)
○○○型					11(12)	※10(15)	3(3)	※4(6)

この結果によれば、『スラヴ』と『露日・会話』はほぼ同じ傾向を示しているが、現代鹿児島アクセントでB型となっている語の分布が若干違っている(『スラヴ』の方が現代鹿児島アクセントに近い)。

まず、現代鹿児島アクセントでA型に属する語のゴンザにおけるアクセント型は、『露日・会話』で再構した通り、/○○¹○/で異論は無いだらう。これは、現代鹿児島アクセントの音韻論的型と全く同じである。

一方B型は、前稿では、『○○○型のアクセント表示から現代鹿児島アクセントと同じ/○○○¹/を再構し、○○○型のものを例外として処理する』という解釈と、『○○○型、○○○型の両方のアクセント表示を信頼し、/○○¹○/から/○○○¹/へ移行する過渡期にあるアクセントと考える』という解釈の二つを提出し、前者は、例外が多すぎる上に、○○○型と○○○型の両方のアクセント表示をもつ語が少なからず存在することの説明に窮することを理由として退け、後者を採用したのだった。その後者にも、A型、B型ともに一時代前の/○○¹○/という安定期を想定しなければならない難点があったが、名詞の場合は助詞がつくことで、また形容詞の場合は活用することでA型、B型の違いを現わすという一応の説明をつけておいた。

しかし、この考えにはやはり異論が出るだろう。筆者も、前稿執筆後、4音節以上の語の場合のB型アクセントに見られる多くの異例を、単純に例外として処理しておきながら、3音節語の場合にこれを適用しないという自己矛盾に気がついた。ただ、かりに例外説を採用するとしても、2音節語の場合にあれほどの正確さで自己のアクセントを記述できたゴンザが、3音節語の場合にかくも粗雑になるものかという疑いは残る(多音節語の方がアクセント認識が難しいという一般的事実を認めるとしても)。

あるいは、第三の考え方として、実は音声学的に○○○という音調型であった(音韻論的には/○○○¹/)ため、アクセント表示が第2音節と第3音節で動揺したのだという見方も可能かもしれない。

いずれにしろ、筆者の基本的な考え方は、ゴンザのアクセント表示をできる限り信頼し、いかなる説明も不可能な場合に初めて例外として処理するというものである。

3.3 次に、特殊音節を含む3音節語を検討する。韻律論的単位はひとまずシラビームと仮定しよう。シラビーム分析における従属音節を◎、1シラビームを{ }で表示することにする。

{Ó} {○⊙} 型

<A型>明かり(アカイ、175)錨(イカイ、164)送り(オクイ、71)踵(キビス、170・175)煙(ケムイ、103・162)小牛(コウシ、40)子供(ゴドム、104)小指(コイビ、180)印(シユリユシ、58 シユルシ、125・135)縮み(チヂュミ、168)戸口(トグチ、88)所(トコル、187)東(フイガシ、63)平地(フイラチ、97)魔物(マモン、41・64・76・76)回し(マウシ、76)柳(ヤナギ、138)、去年(キヨネン、175)磁石(ビシヤク、177)頭巾(ヅキン、161)駄賃(ダチン、140)理屈(デイクツ、72)

<B型>画家(イエカキ、148)鳥(カラス、158)千鳥(チドリ、168)鼠(ネツミ、186)目付き(メツキ、49)屋敷(ヤシキ、89)、五月(ゴケツ、177)書物(シヨモツ、159)二年(ニネン、89)二番(ニバン、68)

{○⊙} {○} 型

<A型>海豚(ユルカ、90)重さ(オムサ、74)車(クルマ、160)小舟(コフネ、162)釣瓶(ツルベ、54)納戸(ナンド、155・161)娘(ムスメ、99・103)、カルタ(カルタ、155); 煙い(ケムカ、103)丸い(マルカ、167)

<B型>明日(アシタ、120・129)油(アブラ、114・178)戦(イクサ、59・166)母(イチゴ、133)奥歯(オクバ、137)頭(カシタ、52)刀(カチナ、179)狐(キチネ、172)鯨(クジラ、157)櫛(クツワ、186)雀(スズメ、61・64)跛(チンバ、158)柱(フシタ、178)髻(ピンタ、50)袋(フクロ、164)枕(マクラ、56)臉(マプタ、74・137)、一度(イチド、108)学者(ガクシャ、82・159)喧嘩(ケンカ、36・100・100・188)疝気(シエンキ、156)貧者(フインジャ、41); 安い(ヤスカ、91)悪い(ウルカ、60)

{○} {○⊙} 型

<A型>仕切り(シキリ、178)羊(フツジ、34)二つ(フタツ、87)、普請(フジン、132)蒲団(フトン、40)

<B型>欠伸(アクビ、133)兎(ウサギ、122)画家(イエカキ、113)烏帽子(イエボシ、83)鏡(カガミ、133)鳥(カラス、62・76)薬(クスイ、64・172)曆(コヨミ、154)白味(シトミ、41・41)師走(シウス、89)磁石(トイシ、39)歯茎(ファゲキ、91)一つ(フトツ、106)、二百(ニフィク、88)飛脚(フキヤク、80)柄杓(フシヤク、160・163)、シャボン(シャボン、186)

{○⊙} {○} 型

<B型>戦(イクサ、29)

これらの中には、分析の仕方が不分明のものが若干あるが、一応上のように分類した。これを、わかり易い表にしてみよう(表3)。

これらのアクセントが、もし現代鹿児島アクセント同様シラビームで説明しうるものであるならば、全体は2シラビームとなり、2音節語のアクセント型、すなわちA型~/○¹○/、B型~/○○¹/に対応するアクセント表示になっているはずである。結果を見てみよう。

<シラビーム分析で都合が良いもの>={Ó} {○⊙} 型、{○⊙} {○} 型~<A型>(32語41例)、{○} {○⊙} 型、{○⊙} {○} 型~<B型>(18語22例)=計50語63例

<シラビーム分析では都合が悪いもの>={Ó} {○⊙} 型、{○⊙} {○} 型~<B型>(34語43例)

(表3)

	A 型		B 型	
{Ó} {O@} 型	22(29)	※11(17)	10(10)	※6(6)
{Ó@} {O} 型	10(12)	※14(18)	24(33)	※23(26)
{O} {Ó@} 型	5(5)	※8(8)	17(21)	※36(43)
{O@} {Ò} 型			1(1)	※2(2)

、{O} {Ó@} 型～<A型>(5語5例)=計39語48例

すなわち、シラビーム分析で都合の悪いものが、異語数では43.8%、延語数では43.2%に達するのである。特にB型の不一致率は著しく、異語数で65.4%、延語数で66.7%にもものぼる。ちなみに、『露日・会話』においては、シラビーム分析で都合の悪いものは、異語数では37.0%、延語数では33.3%、B型の不一致率は、異語数で43.3%、延語数で41.6%とやや低かった。しかし、いずれにせよ、ゴンザのアクセントの韻律論的単位をシラビームと認定するには都合の悪い例外の数であることに変わりはない。

これに対して、モーラで解釈しようとするれば、『アクセント核が来るべきモーラが特殊モーラである場合、核は1モーラ前にずれる』という規則を設けることになるが、明らかな例外となるのは、○○○型～A型のうち明かり・錨・子供・所・東・平地・魔物・回し・柳・去年・磯石・の11語14例、○○○型～B型のうち画家・鳥・千鳥・五月・書物・二年・二番の7語7例、合わせて18語21例にとどまる。これは、全用例に対して異語数20.2%、延語数18.9%の比率で、シラビーム分析の例外よりかなり低率となっている。ただし、B型アクセントに/○○¹○/と/○○○¹/の二つの音韻論的型を認めた上での話で、その認定そのものに問題を残している以上、あまり強く主張するわけにもいかないだろう。

3.4 次に、ゴンザの3音節動詞のアクセントは、名詞・形容詞に比較するとかなり整然とした姿であられる。以下には、現代鹿児島アクセントのA型、B型と比較する形で出すが、このA型、B型の内容はアクセント語類の一類、二類と大部分一致するものである。分析方法はシラビームに拠る。

{Ó} {O@} 型

<A型>上がる(アガル、56・64)上げる(アグル、55・55)遊ぶ(アスブ、78・85・138)
 洗う(アラウ、71・143・186)入れる(イユル、43・52・157・189 イルル、51)植える
 (ウユル、65)換える(カユル、53・187)変わる(カワル、144)括る(クビル、44・75・1
 20・189)死ぬ(シヌル、161・185)添える(ソユル、57・93・190・190)滾る(ダギル、7
 1・156)貯める(タムル、162)縮む(チヂム、163)撮む(ツマム、121)連れる(ツイユ
 ル、55)擦る(チスル、71・124・143・172・177・192)握る(ニギル、122)泥濘る(ヌカ
 ル、75)濡れる(ヌユル、55・183)眠る(ネブル、100)載せる(ノスル、191)望む(ノゾ

ム、141)登る(ノボル、52)拾う(フイラウ、189)曲がる(マガル、77)曲げる(マゲル、79・120・123・132・163・189)回す(マワス、43・47・65・167)貫う(モラウ、183)焼ける(ヤクル、70・81・111・132)痩せる(ヤスル、146)揺する(ユスル、161)汚す(ウゴス、124)寄せる(ヨスル、44)沸かす(ウカス、190)渡す(ウタス、65・70・132・141)笑う(ウラウ、62・84・122)

<B型>移す(ウツス、150)落ちる(オツル、125・144)返す(カヤス、141)交わす(カワス、125)悔いる(グユル、110)肥える(ゴユル、114)叩く(タタク、131)出来る(チェクル、95・105・136)融ける(トクル、146)吃る(ツモル、122)投げる(ナゲル、140・143・156)撫でる(ナツル、77)翳る(ナブル、100)逃げる(ニゲル、140)誉める(フォムル、73)分ける(ワクル、131)

{○}{○◎}型

<A型>歌う(ウタウ、59・68)渴く(カウク、110)仕切る(シキル、83・119・128・178)捨てる(スツル、85)座る(スウル、128)使う(ツカウ、52・139・140・141・142・144・151・151)繋ぐ(ツナグ、64)塞ぐ(フサグ、120・123・129・167・169)招く(マネク、177・178)雇う(ヤトウ、191)

<B型>余る(アマル、143)歩む(アユム、73)動く(イゴク、88・156)移す(ウツス、72)拝む(オガム、183)起きる(オキル、63)興す(オコス、59)惜しむ(オシユム、110)落ちる(オツル、64・72)落とす(オトス、69)返す(カヤス、70)掛ける(カクル、42・70・191)絞る(シボル、133)終う(シマウ、47)麿る(スダル、152)倒す(タラス、42)叩く(タタク、29・29・29・129・161)立てる(タツル、59)作る(ツクル、79)出来る(チェクル、71)通す(トラス、49)通る(トラル、68・180)灯す(トボス、48・127)萎える(ナユル、51)投げる(ナゲル、39・46・51・142・179)撫でる(ナツル、174)習う(ナラウ、146・189)逃げる(ニゲル、69・92・131)盗む(ヌスム、51)測る(ファカル、53)挟む(ファサム、73)走る(ファシル、41・174)光る(フカル、59)吠える(ホユル、38・170)誉める(フォムル、63)混ぜる(マズル、53・125・187)見合う(ミヤウ、50)見える(ミユル、49)見せる(ミスル、56・154)見取る(ミトル、99)戻す(モドス、55・57)戻る(モドル、56)許す(ユルス、72)分ける(ワクル、47・97・104)

以上を数表にまとめてみよう(表4)。

(表4)

	A 型		B 型	
{○}{○◎}型	37(78)	※13(19)	16(21)	※2(2)
{○}{○◎}型	10(26)	※1(3)	44(69)	※28(39)

『露日・会話』での、ゴンザのアクセント表示と現代鹿児島アクセントの一致率は、上の表でもわかるように、異語数で93.2%、延語数で92.1%と素晴らしいものであったが、『スラヴ』の場合は、異語数で75.7%、延語数で75.8%とかなり落ちる。しかしこれは単純計算であって、{○}{○◎}~B型の例外のうち、移す・落ちる・返す・叩く・出来る・投げ

る・撫でる・逃げる・替める・分けるの10語は例外でないアクセント表示もあり、また{○}{○◎}~A型の例外のうち、仕切る・捨てる・座る・使う・繋ぐ・塞ぐの6語は、前にも述べたように第1音節の sonority に問題のある語である。さらに細かく見れば、{○}{○◎}~A型の濁く・招く・雇うの3語は、金田一春彦氏のアクセント語類では第二類に属する語であるから、むしろゴンザのアクセント表示の方が正当とも言えるのである。このようにして見ていくと、『スラヴ』での例外は思いの外少ないのかもしれない。

さて、上の結果から明らかなように、ゴンザの3音節動詞は、シラビームによって見事に分析されるのである。これは、3音節名詞・形容詞の場合と著しく相違している。この意味については、後に触れることにする。

4 多音節語のアクセント

4.1 4音節語のアクセント ここでも名詞・形容詞・動詞を扱うが、モーラ数とシラビーム数が一致するのは、『露日・会話』同様名詞だけである。

○[´]○○○型

<B型>腸(フ[´]アラワタ、157)

○[´]○[´]○○型

<A型>銅(アカガネ、186)気[´]任せ(キマカシエ、84)鼻[´]声(ファナゴイエ、79・85)漢[´]垂[´]れ(ファナタイエ、56)人[´]中(フトナカ、67)

<B型>船[´]方(フナカタ、162・178)

○○[´]○○型

<B型>鉄(クロガネ、112)米[´]倉(コメクラ、114)殿[´]様(トナサマ、82)

用例は少ないが、一応数表にまとめてみよう(表5)。

(表5)

	A 型		B 型	
○ [´] ○○○型			1(1)	
○ [´] ○ [´] ○○型	5(6)	※5(10)	1(2)	※3(3)
○○ [´] ○○型			3(3)	※3(4)

これによれば、A型はやはり/○○[´]○○/と再構する以外に無いだろう。B型は二つに分裂しているが(腸を除く)、○○[´]○○型から/○○○[´]○/を再構し、○[´]○○○型のものを例外として処理すべきかと思われる。これに矛盾は無いが、以下に特殊音節を含む語によって検討してみよう。多音節語の場合は、シラビーム数の認定が難しそうなので、とりあえずモーラで示す。

○[´]○○○型

<A型>雄[´]鶏(オンドイ、168)舵[´]取(カチトイ、163)小[´]娘(コムスメ、99)積[´]み立[´]て(ツミ)

タチェ、162・164)始まり(フ^レジマイ、53・77・130・143)蜂の巣(フ^レチノス、35)挽^レ目(フ^イキウス、113)懐(フ^ツクラ、174)水汲み(ミ^ツクミ、54 ミ^ツクミ、54)水車(ミ^ツクマ、54・179)、歴々(デ^キレキ、82);案じる(ア^ンジユ、94・120)入り込む(イルコム、69)聞き取る(キ^キトル、72)汲み出す(ク^ミダス、71)汲み取る(ク^ミトル、73・147)突き出す(ツ^キダス、72)飛び出る(ト^ビヅル、71・145 ト^ブヅル、72)泣き出す(ナ^キダス、72)慰む(チ^グサム、172)並べる(ナ^ラブル、71)乗り込む(ノ^イコム、130)始める(フ^レジムル、130)外れる(フ^レヅユル、180)引き裂く(フ^イキサク、91)引き出す(フ^イキダス、69・71・140・140・142・146・151)引っ張る(フ^イッパル、192)踏み込む(フ^ムコム、75)呼び出す(ヨ^ビダス、71)忘れる(ワ^スユル、119)

<B型>書き物(カ^キモン、154)雷(カ^ミナイエ、84)髪の毛(カ^ミノケ、52)切り目(キ^ルクテ、166)桶の木(ク^スノキ、156)懇ろ(ネ^ンゴロ、36・101・101)針差し(フ^テイサシ、138)飯炊き(メ^シタキ、156)雌鶏(メ^ンドイ、168)焼き餅(ヤ^キモチ、172)、行灯(ア^ンドン、170)七月(シ^チゲツ、153)人間(ニ^ンゲン、176)半分(フ^アンブン、64):打ち込む(ウ^チコム、60)惜しがる(オ^シガル、131)書き込む(カ^キコム、72)切り込む(キ^ルコム、44・72)差し込む(サ^シコム、68)助ける(タ^スクル、139・152)年取る(ト^シトル、80)暖める(ヌ^クムル、85)飲み込む(ノ^ミコム、78・141)吐き出す(フ^ケキダス、72 フ^ケダス、72)引っ付く(フ^イツク、173)吹き込む(フ^クコム、190)欲しがる(フ^オシガル、97・110・111)見回す(ミ^マワス、72)持ち出す(モ^チダス、70・73・140・144):少ない(ス^クナカ、177)

○¹○¹○¹○¹型

<A型>喉(ア^カツギ、127)商人(ア^キユンド、168)徒ら(イ^タヅラ、68)猪(イ^ノシシ、35・46・91・154)胃袋(イ^エブクロ、112)入れ物(イ^イエモン、51)固まり(カ^タマイ、169)金釘(カ^チクギ、76)金槌(カ^チツツ、181・184)獣(ケ^ダモン、116)告げ目(ツ^ゲゲテ、89・96・192);燃え付く(モ^イエツク、121)汚れる(ヨ^ゴユル、121)

<B型>馬乗り(ウ^マノイ、162)御袋(オ^ウクロ、159)草取り(ク^サトイ、133)白上(シ^ラツテ、187)一粒(フ^トツツ、81・133)物好き(モノ^ズキ、176)山鳥(ヤマ^トイ、92);諍う(イ^サカウ、91)腐れる(ク^サユル、79・102・121・141)

○¹○¹○¹○¹型

<B型>雨水(アマ^ミヅ、54)馬乗り(ウ^マノイ、65)親指(オ^ヤイビ、34)草取り(ク^サトイ、40)丸つ(ココ^ノツ、90)強者(ツ^ワモン、31・150)咎人(ト^ガニン、75・160)生物(ナ^マモン、51)鶏(ニ^ワトイ、160)一口(フ^トグテ、78)物好き(モノ^ズキ、48)、一寸(イ^ツスン、47);諍う(イ^サカウ、64・121)受け取る(ウ^ケトル、63)打ち切る(ウ^チキル、146)打ち込む(ウ^チコム、43)惜しがる(オ^シガル、34)覚える(オ^ボユル、64・116)腐れる(ク^サユル、132・146)騙かす(ダ^マカス、142・160・171)流れる(ナ^ガユル、52・63・63・64・84)欲しがる(フ^オシガル、60)分かれる(ワ^カユル、173)

以上を数表にまとめたのが、表6である。

ここでも、『スラヴ』と『露日・会話』はほとんど同じような傾向を示しているが、片方しか出てこない単語が非常に多いことを考えれば、十分に意味のある結果である。

この表から、やはりA型~/○○¹○○/、B型~/○○○○¹○/が確認できそうである。B型には、A型に相当する例外が多いが、前稿で述べたように、<複合語に対する分析的ア

(表6)

	A 型		B 型	
○ [´] ○○○型	30(46)	※10(12)	30(41)	※18(22)
○ [´] ○○○型	13(19)	※14(16)	9(13)	※7(9)
○○ [´] ○○型		※1(1)	23(34)	※18(20)
○○○ [̀] ○型				※1(1)

クセント表示)と<基本型アクセントに類するものの存在>の二つで説明可能と考える。

4.2 5音節語のアクセント 『露日・会話』には、モーラ数とシラビーム数の一致する語が、肋骨(○[´]○○○○型~<A型>)と裏表(○○○○[´]○型~<B型>)の2語あったが、『スラヴ』には次の一語しか見当たらない。モーラで示す。

○[´]○○○○型

<A型>二心(フ[´]ダココロ、89)

特殊音節を含む5音節語は以下の通りである。

○[´]○○○○型

<A型>押し付ける(オ[´]シツクル、70・87・103・132・141・146)突き落とす(ツ[´]キオトス、150)積み立てる(ツ[´]ミタツル、119・190)引き破る(フ[´]イキヤブル、141)引っ掛ける(フ[´]イッカクル、122)

<B型>腋の下(ウ[´]キノシタ、186)、打ち殺す(ウ[´]チコロス、123・127・139)書き付ける(カ[´]キツクル、64・126)書き直す(カ[´]キナヲス、145)

○[´]○○○○型

<B型>光り物(フ[´]カイモン、183)、うろたえる(ウ[´]ロタユル、97)汚がる(キ[´]タナガル、79)纏まえる(ツ[´]ガマユル、148)

○○○○○型

<B型>伸直り(ナ[´]カナライ、180)裸麦(フ[´]ダカムギ、114)

○○○○[´]○型

<A型>焼き付ける(ヤ[´]キツクル、122)

<B型>泡立てる(ア[´]ワタツル、68)書き付ける(カ[´]キツクル、190)流れ着く(ナ[´]ガイェツク、72)見合わせる(ミ[´]ヤワズル、80)

以上を表にまとめてみよう(表7)。

この結果は、例外がやはり多いが、前稿の通り、A型~/○○[´]○○○/、B型~/○○○[´]○/と考えるとよからうと思う。

(表7)

	A 型		B 型	
ó○○○○型	5(11)		4(7)	※1(1)
○○ó○○型		※3(4)	4(4)	
○○○○ó型			2(2)	※3(4)
○○○○○○型	1(1)		4(4)	※3(4)

5 まとめその他

5.1 ゴンザのアクセント体系 前節までの検討結果を総括してみる。多音節語、特にB型アクセントの再構にはなお問題が残されているが、ゴンザのアクセント符号の性格を考えれば、やむをえないことかもしれない。一応の結論として、ゴンザのアクセント体系は、前稿の結論通り、次のような二型アクセントであったと考えておきたい(多音節語に三型以上あったと考える必要のないことは、細かく述べないことにする)。現代鹿児島アクセントと比較対照して示す。

音節数	ゴンザのアクセント		現代鹿児島アクセント	
	A 型	B 型	A 型	B 型
2	/O ¹ O/	/OO ¹ /	/O ¹ O/	/OO ¹ /
3	/OO ¹ O/	/OO ¹ O/(>/OOO ¹ /)	/OO ¹ O/	/OOO ¹ /
4	/OO ¹ OO/	/OOO ¹ O/	/OOO ¹ O/	/OOOO ¹ /
5	/OO ¹ OOO/	/OOOO ¹ O/	/OOOO ¹ O/	/OOOOO ¹ /
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮

上のようなゴンザのアクセント体系が、国語アクセント上、どのような地位を占めるかについては、前稿で述べたので繰り返さない。

5.2 韻律論的単位の問題 これも前稿で少し触れたが、ゴンザのアクセントが現代鹿児島アクセント同様、完全にシラビームを韻律論的単位としていると見るのも、筆者としては疑問なしとしない。4音節以上の語の場合は、モーラの方が理解しやすいように思うし、3音節語においても、名詞・形容詞と動詞の差が気になる。あるいは、単位そのものも過渡期にあるということは考えられないであろうか。つまり、ゴンザの言語はモーラからシラビームに移行しつつある状態を映しているとするのである。恐らく移行する順序としては、音節数の少ないものからであろうが、ゴンザの状態もそのようになってはいないだろうか。3音節語において、動詞が名詞・形容詞に先んじているのは、名詞・形容詞の場合は語によって2シラビームとなるものと3シラビームのままどまるものが出て

くるのに対して、動詞の場合、総ての語が2シラビームに統一されるために、移行がスムーズになされたとは考えられないだろうか。

5.3 崎村弘文氏「ゴンザのアクセント・私考」について 本誌15号(1985年2月)に鹿児島大学の崎村弘文氏が上のような題で論文を書かれたが、中に筆者の「漂流民ゴンザのアクセント」(本誌13,14号)に対する批評の部分があるので、一言触れておきたい。崎村氏の批評はおもに方法の問題についてであった。筆者はその後、はしがきで述べたように、追考の論文を書いて、筆者なりの方法の反省をした(1985年3月 ただし原稿提出は1984年10月)が、それと今回のもので氏の批評に対するお答えになったであろうか。氏と筆者とでは、出発点で既に食い違っているようである。筆者にとっては、ゴンザのアクセントが信頼できるかどうか、まず問われなければならない問題だった。アクセント語類や現代鹿児島アクセントとの比較に重点を置いたのはそのためである。現在方言と違って歴史的文献を扱う場合には、常識的な方法ではないのだろうか。そして、信頼できそうかどうかということがはっきりした段階で、型は如何、さらに体系はと進んだわけである。氏は体系化後に通時的比較をしてもよいと言われるが、その体系化は何をもとにしてなされるのだろうか、筆者にはよくわからない。この方法の違いによるものか、筆者の再構した体系と氏のものとは、3音節以上がかなり相違している。もう一つ、ゴンザのアクセントの韻律論的単位については、氏と筆者の間にそれほどの懸隔はなさそうであるが、モーラ、シラビーム両方の可能性を考え、様々検討した挙句、結果的にシラビームかとした筆者の行き方は、氏にはまどろっこしく映るかもしれない。この他にも述べたいことはあるが、氏の論文は未完なので、これ以上の言及はさけない。恐らく本誌に載るであろう氏の続稿とこの小論によって、問題のありかが一層明らかになることを期待する。

6 あとがき

はしがきに述べたように、本稿は『露日・会話』の検討で得た結論を、『スラヴ』で追認しようとするものであったが、所期の目的はほぼ達せられたことと思う。ただ、『スラヴ』におけるゴンザのアクセント表示の精度は、『露日・会話』ほどではなかった。この事実に向かひの意味を持たせようとするならば、あるいは次のようなことであるのかもしれない。すなわち、『露日・会話』は1736年の完成であるが、この時ゴンザと生涯を共にした25歳年上のソーザはまだ存命中で、恐らくアクセントについてもゴンザを助ける場所があっただろう。ところが、『スラヴ』の編纂は同じ1736年ながら、ソーザの死の直後に開始されたものである(村山七郎氏の解説による)。もちろん『露日・会話』のアクセントはそのまま用いたであろうが、それに無いものは当然のことながらソーザに確かめることができなかったわけである。この辺に理由があるのではないかと思う。

最後に、前稿のあとがきで述べたことの繰り返しになるが、ゴンザのアクセント資料にはまだ『Orbis pictus』というものがあり、未紹介である。1739年編纂というのはちょっと気になるが、『露日』より豊富なアクセント記載量ということなので、ゴンザのアクセントをより明らかにするためにも早期の続刊を期待したい。

(宮崎大学教育学部講師)